

震災がれきを再利用

宇都宮大学安森亮雄研究室が大谷石で喫煙所を製作

宇都宮大学安森亮雄研究室（安森亮雄准教授）は3月下旬、同大学陽東キャンパス内に震災がれきの大谷石を再利用した喫煙所を完成させた。作品は「小さな蔵、大きな家」をテーマとし、大谷石を使用した大きなベンチに、「小さな蔵」をイメージした切妻屋根の上屋を設置。大谷石の古さと、ストリート・ファ

ニチャーの新しさが一体となった作品として仕上がっている。設計を担当したのは昨年度まで同研究室に在籍し、プロジェクトリーダーを務めた佐原謙介氏。施工は大谷石職人の指導の下、同研究室の大学院生6人が手掛けた。また、上屋は総合建設業の興建（清水伸代表取締役）が設置を行った。

修士2年の福田聖也さんは、「大谷石の特長は講義等で知っていたが、実際に材料として扱うと非常に重かった。大学では図面や模型を扱うことが中心となるが、自分たちで施工することで材料の質感や性質を実感することができ、貴重な経験となった」と施工に携わった感想を話した。

安森准教授は、東日本大震災で発生した約8万6000トンの大谷石がれきに着目。大谷石特有の温かみや質感が生きるブロックの再利用方法を模索した。同大学では、陽東キャンパス内の4施設に設置されていたそれぞれの喫煙所を統合する計画があったという。その動きに呼応し分煙化を進めるこ

とで、キャンパス内の環境を美化しようと高プロジェクトを発足させたのが同研究室だった。大谷石を積み上げる作業は学生たちが担当した。当初は石材一本を運ぶために4人の労力を必要としたが、角を軸に歩かせるように運ぶと1人の力でも運ぶことが可能となった。「作品が完成する頃は学生一人一人が職人のような手さばきになっていった」と、安森准教授は振り返った。

同施設は、学生同士の憩いと語らいの場となっているほか、他施設との分煙化を図ることでキャンパス内の環境改善に寄与している。安森准教授は、「大谷石を利用したストリート・ファニチャーがバスやLRVの停留所として宇都宮市内の景観を形成し、まち中を歩いて楽しい場所となることを目指している。調査研究とともにデザインを固直し、宇都宮を良い環境とした」と述べ、大谷石の可能性に期待を寄せた。



安森亮雄研究室が設計と施工を手掛けた大谷石の喫煙所（宇都宮陽東キャンパス内）

石材は、作業のしやすさと安定性を確保するため平積みで組まれている。壁の高さは建築基準法に適合した1・2mとし、さらに鉄筋を通すことで、より安全な方法を採用している。大谷石は採掘された年代によって、つるはしとチェーンソーで掘られたものの2種類があり、表面の質感が大きく異なる。表面が比較的滑らかなものはベンチの座面、粗いものは壁など造材適所に配置。また角が丸みを帯びたものや欠けたものは、透かし積みに利用してデザインとして生かしている。

今回使用した腐材は、芳野町から引き取ったもの。約90kg～100kgの石材が150本程度使われている。同施設は、学生同士の憩いと語らいの場となっているほか、他施設との分煙化を図ることでキャンパス内の環境改善に寄与している。安森准教授は、「大谷石を利用したストリート・ファニチャーがバスやLRVの停留所として宇都宮市内の景観を形成し、まち中を歩いて楽しい場所となることを目指している。調査研究とともにデザインを固直し、宇都宮を良い環境とした」と述べ、大谷石の可能性に期待を寄せた。